

房総をめぐる奈良・平安時代

土器生産体制の展開に関する諸問題

佐久間 豊

目 次

1. はじめに	339
2. 須恵器生産体制の問題	339
3. ロクロ土師器出現と量産体制の問題	345
4. 古代末期における土師質土器の評価	348
5. おわりに	352

1. はじめに

私が千葉県教育委員会に就職し、文化財センター柏事務所で常磐自動車道関係遺跡の発掘調査に従事したのは昭和53年4月のことであった。それより以前は、東北地方で奈良・平安時代の土器について関心を持っていた私が最初に驚かされたのは、関東と東北の土器様相の違いであった。私は、水砂遺跡や中山新田II遺跡^(註1)の発掘調査に関ったのであるが、これらの遺跡の奈良・平安時代の竪穴住居址から出土する土器は、内黒土師器がほとんどなかったり、須恵器^(註2)ではヘラ切り底のものばかりであった。その当時は、ロクロ土師器についても、ただ単に還元焙焼成の不十分な須恵器として認識していたのであった。

その後、数年を経て、立正大学考古学研究室主催のシンポジウム「関東地方における9世紀代の須恵器と瓦」において、千葉県の奈良・平安時代土器研究の現状について発表した訳であるが、他地域の研究の進展に比較して、自らも含めた千葉県の研究の遅れをしみじみと感じたのであった。1983年、市立市川考古博物館において、「房総における奈良・平安時代の土器」についてのシンポジウムが開催され、かなり県下における奈良・平安時代土器研究も進んだかみえるが、この時に提起された問題点は何一つ解決されておらず、出土遺物量の増加に伴いさらに様相は複雑化し、新たな問題が生じてきているのが現状である。

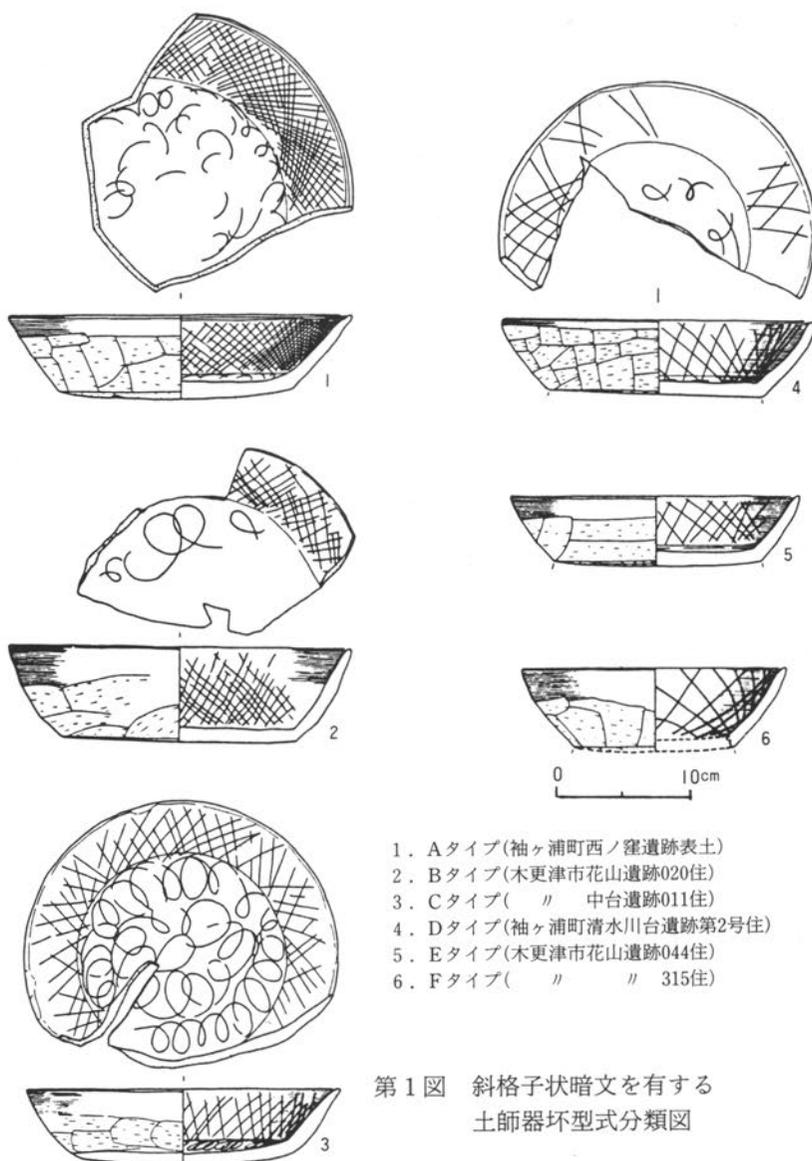
こういった状況の中で、県下では1986年12月に「郡単位」までの土器様相の把握や、集落内における土器様相の展開の解明等を目的にして、再度シンポジウムを開催する動きがある。そこで、本稿ではシンポジウムに向けた問題点の整理も含めて、房総における須恵器生産体制の問題、ロクロ土師器出現と量産体制の問題、古代末期における土師質土器の評価について焦点を絞り、若干の検討を加えておきたい。

2. 須恵器生産体制の問題

房総の律令体制下における須恵器生産は、市原市永田・不入窯^(註4)の操業によって開始されたといわれている。この永田・不入窯の操業開始時期については、須田勉によって、上総国分寺運営上必要な仏器、日常汁器を確保するためのものとし、窯の設定そのものを国分寺造営事業の一環として把え、その成立時期の上限を国分寺建立の詔が發布された西暦741年と考えられている^(註5)。この点については、金子真土から、武蔵国における土器様相の画期や永田・不入窯を猿投窯の流れと把えて猿投窯編年との比較の問題等から、あえて国分寺造営と関連付けることに対する疑問が提示されている^(註6)。確かに、須恵器生産の契機を他の歴史的事象と関連付けることも可能であり、その検討もしているもので、ここでまとめておきたい。房総において、律令体制確立期(7

世紀末～8世紀初頭)の供膳形態は、須恵器では、湖西窯産のものと同様に木葉下窯を中心とした常陸国産のものによって占められる。湖西窯産の須恵器は、古代東海道ルートを利用して搬入されたものと考えられ、この時期のみで搬入はみられなくなるが、常陸国産のものは平安時代に至るまで下総国に対する須恵器供給の主流となっている。これらの須恵器と共伴する土師器は、鬼高式土器の名残のある一群であり、下総国では平城宮Ⅰと考えられる畿内暗文土器もかなり認められる。上総国では、明確な共伴例はないが斜格子状暗文を有する坏で最古のものと同時期と判断される。^(註7) こういった様相は、基本的には、全国的にも律令体制確立期の共通したものと考えられる。つまり、西日本も含め、特に蓋に返りのある須恵器坏と、畿内暗文土器やその影響を強く受けた土師器の出現は、この時期の大きな特色の一つである。服部敬史は、関東地方における須恵器生産の展開を6段階に分け、Ⅱ期(8世紀初～中葉)を官寺・国衙建物の造営に伴って成立した須恵器生産段階として^(註8)いるが、7世紀末～8世紀初頭は、国衙・郡衙建物の造営に伴って成立した須恵器生産段階と把握することができる。西日本においては、須恵器生産は7世紀後葉以降、原則として国毎に行っており、東日本においても同様なことがいえる。しかしながら、国衙や郡衙の造営時について考えると必ずしもそうではない。たとえば、最近土器様相が明確にされた武蔵国府においては、山口編年のN1期では東海地方の搬入品と考えられるものは認められるが、在地産のものの実態は明らかではなく、N2期から須恵器の出土は普遍的となる。^(註9) こういった様相は房総と同様であり、国衙・郡衙建物造営時には、供繕具としての須恵器は、搬入されるもので十分賄えたものと判断される。さらに、N1期の土師器坏は鬼高系統のものと同様に盤状坏が相半ばして出土している。この点も房総とよく似ており、7世紀末から8世紀初頭にかけての律令体制確立期に必要な供繕具としての土器は、須恵器坏ではなく、畿内暗文土器の影響を強く受けた土師器坏であったことが、関東地方の一搬の傾向と言えるのではなかろうか。関東地方におけるこの時期の須恵器生産は、国衙建物の造営に大きな影響を受けながらも、国衙建物造営事業の一環として成立したものもあれば、造営後に成立したものもあつたと多元的に考えるべきであろう。

なお、「上総型坏」の定義について、甲斐型、南武蔵型といっている型に対応できるのかという疑義が金子真土より提起され、1983年のシンポジウムではその答えが不十分であつたので、ここで訂正しておきたい。私はかつて、上総型坏を、「A～Fタイプの斜格子状暗文を有する坏と、暗文がなくとも同形態・同調整技法のものを含めて」^(註11)提唱している。この点については基本的に変化はないが、甲斐型、南武蔵型といっている型に対応できるかとの問題については、一概には肯定することができない。Aタイプのものについては、盤状坏と同じ背景で出現しており、南武蔵型とは成立時期は異なるわけであり同一視はできない。ただし、南武蔵においては盤状坏と南武蔵型坏は同一系譜ではないと判断されており、それを否定するものではないが、



1. Aタイプ(袖ヶ浦町西ノ窪遺跡表土)
2. Bタイプ(木更津市花山遺跡020住)
3. Cタイプ(// 中台遺跡011住)
4. Dタイプ(袖ヶ浦町清水川台遺跡第2号住)
5. Eタイプ(木更津市花山遺跡044住)
6. Fタイプ(// // 315住)

第1図 斜格子状暗文を有する
土師器坏型式分類図

上総型坏は、福田健司の提唱する南武蔵型坏出現の背景は認められず、^(註12) 継続的に形態変化をした土器である。したがって、8世紀第3四半期後半以降は南武蔵型に対応する土器であるともいえる。また、上総型坏は相模型坏と極めて類似した土器であり、亜流ともいえる。しかし、相模国においては盤状坏と相模型坏は別系譜から出現していると考えられるが、^(註13) 上総国においては一つの型に、両方の特徴が含まれているといえる。律令時代の土器様相には、各地に「型」と呼ばれる土器を認めることができるが、律令体制の変質とともに、ある時は全国的に、ある時は地域的にと変化を遂げていったことが、以上の事象からも読み取ることができる。上総型

坏は、盤状坏と同一背景で出現し、相模型坏と同様な形態変化をし、8世紀第3四半期には極めて定型化したものとなるが、相模型坏と違って9世紀に入ると、ロクロ土師器の普遍化とともに急速に消滅した土器であると定義することができる。

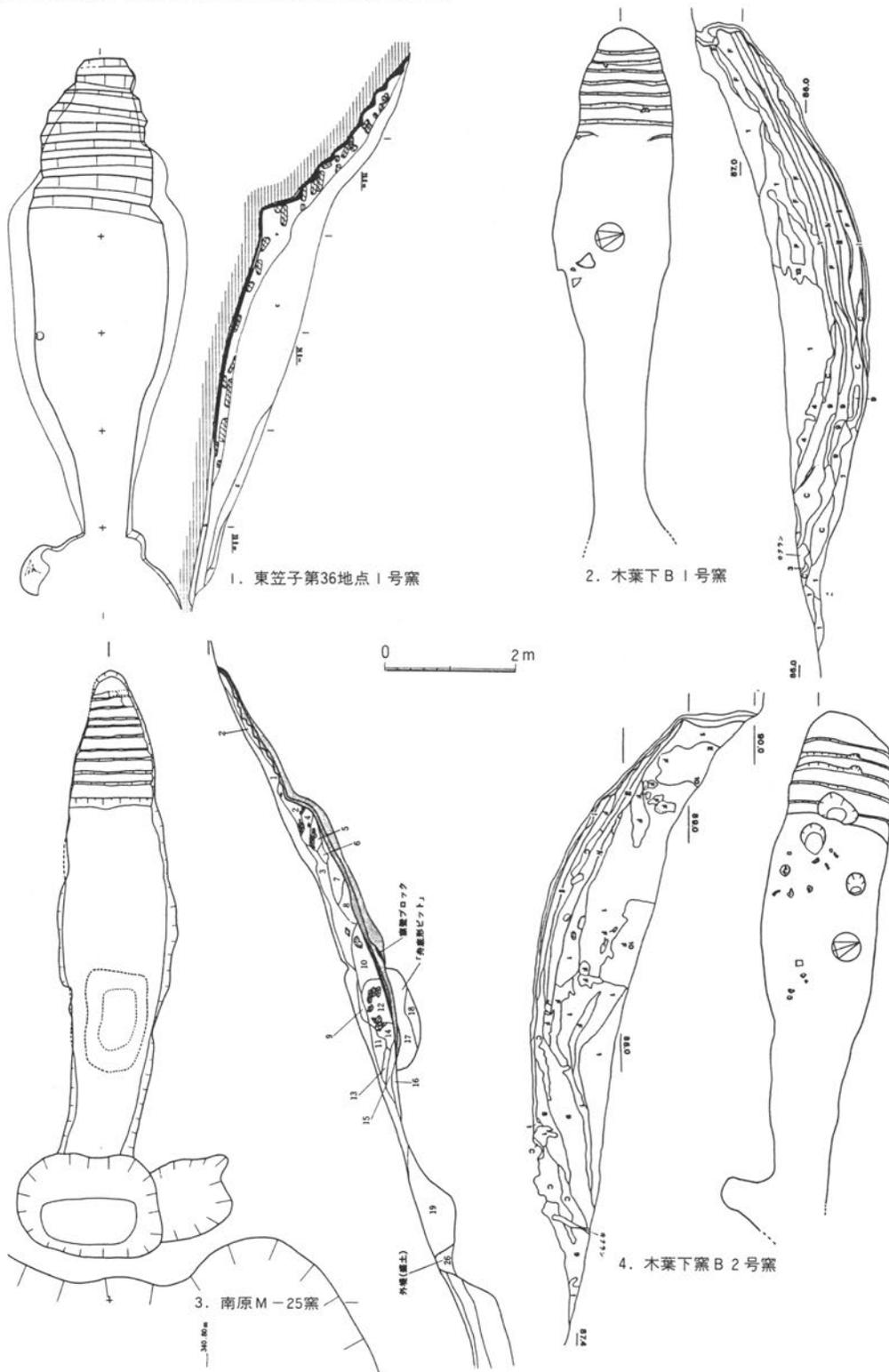
さて、話を元に戻し永田・不入窯の操業開始時期についてであるが、少くとも湖西窯産との共伴関係がないことや、上総型坏との共伴関係等から、国衙建物造営時やそれに近い時期に充てることは否定されるであろう。ただし、国分寺造宮を契機としたかどうかについては、簡単には断定できない。現段階では、不入窯において仏器が焼成されていることや、上総型坏との共伴関係から、歴史事象としては国分寺造営時を充てるのが一番可能性が高いのであって、窯址群の詳細な調査や集落内も含めた上総型坏との共伴関係の実相がさらに明らかにできれば訂正される可能性も否定できない。永田・不入窯は、房総における奈良・平安時代の須恵器生産体制の解明にとって最も重要なものであり、慎重に対処する必要がある。

房総における須恵器生産は、永田・不入窯の操業開始を契機として、8世紀後半には木更津市矢那窯址群^(註14)、千葉市南河原坂第4遺跡^(註15)においても操業が開始され、9世紀に入っても石川窯址^(註16)、八辺窯址^(註17)で小規模ながら操業は継続される。それ以降は、9世紀中葉に中原・宇津志野窯址群^(註18)や、南河原坂第4遺跡^(註19)の西側から発見された窯址などで小規模な操業が継続されたのみで、大規模な窯業地帯の形成には至らなかった。この原因については、燃料や胎土の質の問題が議論されているが、燃料については、確かに一回の焼成で膨大な量の薪が必要なことは理解されるが、房総におけるような小規模な操業で不足するとは考えにくく、あったとしても永田不入窯から石川窯への移動の要因と考えられる程度であろう。関東地方において、須恵器の量産体制が整備する時期は9世紀中葉頃といわれるが^(註20)、この時期に房総において操業されたのが中原・宇津志野窯である。この窯址で焼成された須恵器は他地域のものと比較すると質は極端に悪く、ロクロ土師器と質的にほとんど変わらないものが多い。したがって、房総において大規模な窯業地帯が形成されなかった大きな原因は、関東において量産体制が整備された時期の房総の窯操業地帯の事情によるものと判断される。それは、中原・宇津志野窯周辺における粘土が良好な須恵器を焼成できるものではなかったのである。この時期には、房総にはロクロ土師器生産が定着しており、中原・宇津志野窯の製品ではコスト的にも高く、ロクロ土師器を凌駕することが出来なかったのではなかろうか。この問題については、ロクロ土師器出現と量産体制の項で再度論じたい。なお、中原・宇津志野窯の須恵器は、常陸国の影響を受けて製作されたものであると判断されるが、流通システムは土師器と同様なものであったのではないかと考えている。

つぎに須恵器坏底部切離しの問題から関東の須恵器生産体制について検討したい。この点については、関東地方では以前より、須恵器生産が終了するまで、下野国東部、常陸国、下総国

はヘラ切りであり、他の地域は糸切りであることが指摘されている。^(註21)高橋一夫は、この点を瓦生産体制と関連付けて考えようとしているが、^(註22)ここでは別角度から検討したい。それは、焼成室後半部に階段状遺構を有する（以下局部有階有段と称する）^(註23)須恵器窯の関東・東北地方における存在である。局部有階有段構造の窯は、湖西古窯址群における窯構造の特色として考えられているが、^(註24)関東・東北地方でも、茨城県木葉下古窯址、^(註25)福島県南原古窯址^(註26)で確認されている。

木葉下古窯址は、茨城県水戸市に所在し、須恵器窯址はこの一帯には数多く存在し、現在まで常盤自動車道建設に伴い19基の調査が実施されている。このうち局部有階有段構造を有するものはB地点の2基である。階段はB1号窯で8段、B2号窯で6段確認されており、築造時期は出土遺物から8世紀第2四半期頃と考えられている。南原古窯址は、福島県会津若松市に所在し、古墳時代から中世に至る東北地方でも最大規模の窯址群として知られている。1983年に2基の須恵器窯が調査され、M25、M19と呼称される2基とも局部有階有段構造のものである。M25では10段の階段が確認され、M19は数次にわたる焼成が確認されているが、築造当初のものが局部有階有段構造で11段確認されている。築造時期は、9世紀中頃から後半と考えられている。湖西古窯址群では、6世紀代から窯構造は時間を経るごとに変化し、7世紀前半頃に局部有段構造のものが出現する。7世紀中頃になると、階段部のはじめの段を1mほど焼成部から高低差をつける有階有段構造のものとなり、8世紀前半頃に窯構造は多様に変化をし始めて局部有階有段構造のものは、いわゆる平窯構造のものに受け継がれるようである。^(註27)ここで単純に窯構造を比較すると木葉下窯址B1、2号窯は湖西古窯址では7世紀前半、南原古窯址M25、19は8世紀前半となり、各々の窯での年代観とも大きく異なり、細かな窯構造にも違いがあり、湖西古窯址群との関連を想定することは否定的となる。しかし、木葉下窯址B1、2号窯の坏身の形態をみると湖西古窯址群VI期第1小期のものと類似している。底部切り離し技法からみても、この時期はほとんどの個体が全面にわたってヘラケズリ調整されてしまうため不明のものが多いが、確認できる範囲内では武蔵国においては静止糸切りであり、^(註28)武蔵との関連は否定される。他地域との関連も想定されるが、東北地方南半では静止糸切りとヘラ切りが混在しており、関連性は不明である。湖西古窯址群では、この時期は糸切りは出現していない。前述のとおり、常陸に近接する地域まで房総における律令体制確立期の須恵器は、湖西古窯址群のものが多く確認されているが、8世紀第2四半紀になると、急激に認められなくなる。上総国では8世紀中葉になると永田・不入窯の操業が開始されるが、下総国では常陸国産の須恵器が主流となる。常陸国や下総国では、8世紀初頭から、需要と供給の関係で古代東海道ルートを通じて、湖西古窯址群と強い関連を有していたのであり、須恵器の形態や調整技法等を見ると、製品の流通のみならず、須恵器工人間においても密接な関連を有していたものと判断される。客体的ではあるが湖西古窯址群特有の窯構造を有する窯の存在はその証明であるが、前



第2図 局部有階有段構造を有する須恵器窯址

庭部や、焼成部と階段部の境界の形態など細かな構造に違いがあることから工人そのものが移動してきたかについてはかなり疑問が残る。さて、南原古窯址群についてであるが、報告では窯構造については、「発生、系譜などの問題は年代や各地の状況など各窯跡出土の遺物の検討が不可欠であり……」とし、検討を避けている。ただし、遺物については、焼台・横瓶・双耳瓶の器種の様相、回転ヘラ切りという底部切り離しの問題から北陸地方との強い関連を指摘している。確かに、焼台・横瓶など北陸地方との関連を否定できない要素もあるが、底部切り離しは越後においては地域によってかなりの違いがあるので、北陸地方と南原古窯址を直接的に関連付けるのは疑問であり、むしろ地理的にも下野国や常陸国との関連を考えた方が自然ではなかろうか。窯構造も時間的な問題は残るが、M25、19窯共に局部有階有段構造であり、あながち常陸国との関連を考えることも無理とは言えないのではなかろうか。関東、東北における類例の増加を期待したい。かなり古くから湖西地方と強い関連を有した下野国東部・常陸国の須恵器生産は、湖西窯製品の供給が停止された後も、8世紀中頃まで窯構造も含めて、湖西窯の強い影響を受けていたが、8世紀中頃以降は底部切り離し回転ヘラ切りの伝統を10世紀初頭の生産停止まで守り続け、その影響は南原古窯址群まで及び、この地域では一部北陸地方の影響も受けながら、東北地方最大規模の窯業地帯へと発展したものと考えられるのである。

いずれにしても房総における須恵器の生産体制は、武蔵国のように大規模な窯業地帯を形成することはなかったが、小規模ながらも他の窯業地帯との関連を有しながら変遷しているのあり、今後細かな窯構造や出土遺物の比較検討から、生産構造の立体的解明が必要であろう。

3. ロクロ土師器の出現と量産体制の問題

ロクロ土師器の出現については、特に西日本では須恵器工人が製作したとの考え(註29)もあり一概に結論付けることは危険であるが、ここでは、房総を中心に東日本における状況を服部敬史の説から検討してみよう。服部は、土師器工人は須恵器製作に参画することによって、二つの技術、すなわちロクロ技術と還元焰焼成技術を体得し、特にロクロ技術は回転台利用や木の葉技法しか知らなかった土師器工人にとって画期的なことで、すぐさまこの技術を取り入れ、いわゆる「ロクロ土師器」が出現したと考えている。(註30)この説でまず疑問に思えることは、ロクロ土師器は畿内を除いて8世紀から9世紀代にかけて汎日本的に出現しており、各地域で土師器製作者が須恵器製作に従事させられたとは考えにくい。須恵器が供給された時期について考えてみると、特に岩手県北部などにおいては9世紀中葉までは須恵器の流入すらほとんどないが、県北部では県南部に比較すると極端に少ないが、遅くとも9世紀中葉にはロクロ土師器は出現している。(註31)関東地方でも、特にロクロ土師器が発達した下総では、8世紀中葉にはロクロ土師

器が出現しているが、^(註32)8世紀末までは須恵器窯の出現は見ないし、今後発見されたとしても極めて僅かであったことは確実であり、土師器製作者が普遍的に須恵器製作に参画したとは考えにくい。服部の説を是認したとしても、極めて少数の土師器製作者が須恵器製作に参画して、極めて短期間にしかも広範囲にロクロ土師器を普及させていったとしか考えられない。私は、土師器製作者の須恵器製作への参画を全面的に否定するわけではないが、それはあくまで一部の現象であり、普遍的な在り方としては、須恵器製作への直接の参画とするより、「ロクロを使用して土器を製作する技術」を何らかの契機で習得していったと考えた方が妥当なものと考ええる。土師器坯の底部切離しが回転糸切り、須恵器坯は回転ヘラ切りといった地域が各地に認められることは土師器製作者と須恵器工人の間に厳然とした違いがあったことを如実に示している。いずれにしても、ロクロ土師器の普及は短期間で広範囲に及び驚くべきものがあるが、ここでは土師器製作者がロクロ技術をいかにして習得していったかを検討してみよう。

服部は、須恵器が量産される背景として、郡司層や富豪層の関与を取り上げ、房総におけるロクロ土師器の量産される背景として、郡司層の関与は否定しながらも、ロクロ土師器にもやはり流通機構が存在し、その役割には富豪層が活躍したのではないかと考えている。^(註33)私は、関東・東北地方におけるロクロ土師器出現時期の斉一性と盛行を考え、関東地方における鬼高式土器の斉一性と出土量を考え併せると、富豪層の流通機構への関与を想定する必要はあえてなく、従前と変化のない供給システムであったと考えた方が妥当と考える。郡司層や富豪層等の関与は「ロクロ技術の導入」にこそあったのではなからうか。かなり強力な関与があったからこそ、一斉に土師器製作者たちが容易にロクロ技術を導入し、ロクロ土師器の生産を開始するのに違いない。近年ロクロ土師器を焼成したいわゆる土師器窯の検出が相次いでいるが、10世紀代に大量な土師質土器を生産した袖ヶ浦町永吉台遺跡^(註34)のような多数の窯が1か所で検出されることはなく、供給先は集落内が原則であり、多少拡がったとしてもごく限定された周辺地域までであったと考えられる。

ところで、9世紀代におけるロクロ土師器の各地域の生産量は、基本的には須恵器の供給量との関係で考えられている。^(註35)この点は供繕具としての坯の問題にほぼ限定される訳であるが、東北地方や、下野、常陸ではロクロ土師器を製作し、須恵器もかなり供給されている。須恵器のみでは需要のすべてを賄い切れないからロクロ土師器で不足分を補ったと考えられるが、こういった地域では用途そのものに違いがあった可能性も否定できない。房総においては、胎土の問題から、ロクロ土師器が量産されたが、良好な須恵器が焼成された地域では、補完関係にしろ、用途の違いにしろ、ロクロ土師器、須恵器が共に生産され続けたのであり、これらの生産量の差は各地域の事情により生じたものと考えべきであり、すべての地域を一括して同一レベルで論ずべきではない。

ロクロ土師器の生産は各器種に及んでいるが、主に生産された供膳具について、甲斐型の坏、房総における坏、さらには関東北部から東北地方における内黒土師器の分布範囲を考えると、依然として律令的土器生産体制が維持されている。奈良時代においては、各地で相模型、上総型、北武蔵型、南武蔵型といった坏が生産されているが、やはりロクロ土師器を含めた平安時代の坏にもほぼ同じような様相が認められる。しかし、僅かながらも変化は始まり、平安時代になると、東北地方に代表される内黒土師器は、下野や常陸国の土師器坏の主流を形成し始め、上総と下総ではロクロ土師器の出現時期は違うものの、9世紀代にはほとんど識別できず、同じ様相に統一される。しかし、相模、武蔵では奈良時代と同様な土師器生産が維持されている。こういった状況をさらに詳細に検討することによって、当時の社会構造の変化をある程度まで把握することが可能になってくると考えられる。9世紀代の様相が大きく変化し汎日本的となるのは、次章で検討する土師質土器の生産開始まで待たねばならない。

最後に、房総におけるロクロ土師器坏について考えてみよう。奈良時代には、下総国は武蔵国と強い関連性を有しながらも、8世紀中頃には、箱状を呈するロクロ土師器坏が出現する。この坏は、口径を減少し、器高を増すといった形態変化を遂げながら9世紀代になると、いわゆる「逆台形」を呈するものに統一される。上総国においては、8世紀代は上総型坏が盛行するが、8世紀第4四半期になると箱状を呈するロクロ土師器が出現し始め、9世紀代になるといわゆる「逆台形」を呈するものになり、上総型坏は急激に消滅し、ロクロ土師器坏のみとなってしまう。前述のとおり、9世紀代になると、両総は同一様相となる。上総国の箱状を呈する坏は、下総国の影響下に出現したものと考えられ、基本的には両国とも同一系譜上のロクロ土師器と考えてまちがいない。安房国においては、資料数が少なく様相を把握することは困難であるが、安房国分寺跡では両総地域と同じようなロクロ土師器坏が認められる。こういった様相は、宝亀2年(771年)の古代東海道ルートの変更に伴う、房総における社会構造の変化に対応するものとも考えられるが、詳細は後日検討したい。他の地域では、房総のロクロ土師器に類似したものとしては三浦半島において9世紀後葉に「ロクロ使用の酸化焰焼成の土器」が認められるのみであり、この土器群も次章の土師質土器と関連性を有するものと考えられ、房総と同一レベルでは論じられない。したがって、房総におけるロクロ土師器坏は、この地域独特のものであり、「房総型」のロクロ土師器と提唱しても、差し支えないと考えられる。「房総型」ロクロ土師器の特徴についてまとめると、「8世紀中葉に下総国で箱状を呈するものとして出現し、9世紀代になるといわゆる逆台形を呈するものとして極めて定型化し、房総全域に普及する。法量は、時代を下るにしたがって、口径は減少し、器高は増加する。成形は粘土紐で巻き上げた後、ロクロナデし、最後に体部下半及び底部を回転或いは手持ヘラケズリ調整を施す。底部切り離しは、基本的には回転糸切りである」と定義することができる。今後早急に、

詳細な型式分類と編年作業を実施する必要があると考える。

4. 古代末期における土師質土器の評価

土師質土器は1981年古代末期以降の土器群を特徴付けるものとして中沢悟によって^(註38)提唱され、用語の適当性の可否を中心として、現在も論議が続けられている。1986年2月には神奈川考古同人会において、「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」と題したシンポジウムも開催され、^(註39)除々にその実態が解明されつつあるが、依然として多くの問題を内包しているといえよう。

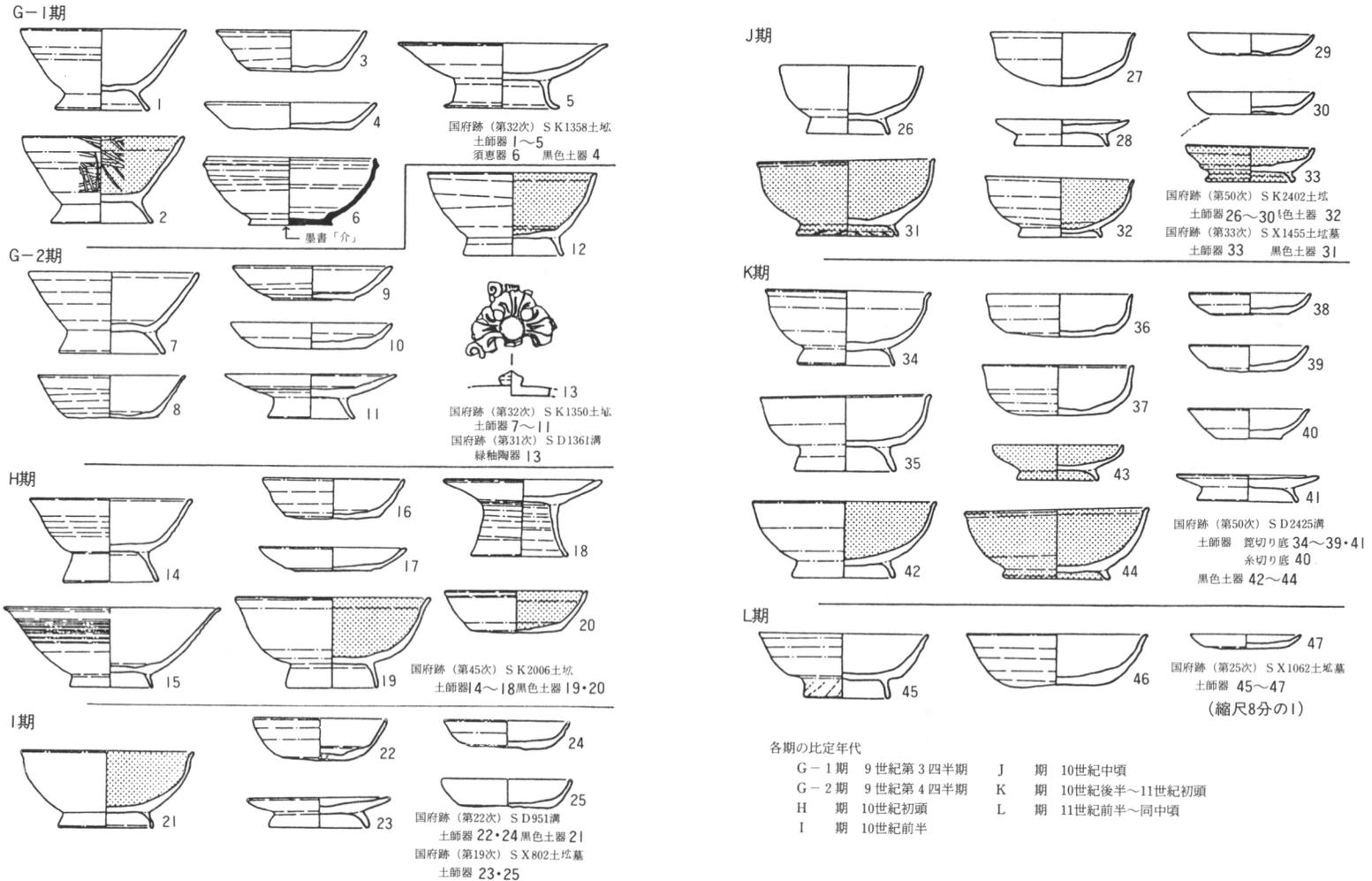
まず用語の問題から検討すると、私はかつて、袖ヶ浦町永吉台遺跡における9世紀代以降の土器群を検討した折に、^(註40)ロクロ土師器は、10世紀第3四半期になると、それまで極めて定型化されていたものが、底径は小さくなり回転糸切り無調整のものに変化し、10世紀第4四半期には、底径は非常に小さくなり、体部下半から底部にかけて回転糸切り後荒い手持ちヘラズリするものに変化するという現象に着目した。さらにこの時期になると、供膳具の中に足高高台付坏・小皿が出現するといった変化を考え併せて、ここに土器生産体制上大きな画期を見出し、10世紀第4四半期以降の古代末期の土器群をロクロ土師器とするより、中世の土器生産体制へとつながる土器群として「土師質土器」と位置付けた。^(註41)この点は中沢悟の土師質土器の概念を踏襲している訳だが、中沢の須恵器製作技術を踏襲していると主張する点については、全面的には同意しかねる。これに対して吉岡康暢は「……関東西部のようにロクロ土師器の展開が遅れ、突然的にいわゆる土師質土器に転換するような地域で見ますと、たいへん大きな画期として押さえられましようが、上総を始めとした地域では段階的に変化するとも見られる。……10世紀代後半のこちらで言うロクロ土師器から土師質土器への転換期は、律令的な土器生産体制が急速に解体に向かう時期といえる。」とし、土師質土器という設定の仕方よりも、ロクロ土師器の第二段階として扱った方が妥当であると主張している。また、工人については、「こちらの土師質土器の段階では、もう土師系とか須恵系といったことをそれほど強く意識しなくても良い段階だ」と考えている。^(註42)服部敬史は、これを受けてさらに論を展開し、前述の1986年2月のシンポジウムの基調報告において、『中沢が提唱し、筆者もまたその概念を継承した「土師質土器」は、須恵器生産地帯の変革の様相を指摘し、中世土器を見すえた点においてきわめて的確性があり、現在でもその評価はうすれていない。ただ吉岡のように、広域的に概観する場合の統一的概念としては、いささか不適当な用語であることは既にみてきたところである。したがって、彼我の共通項を生かせば、ロクロ土師器とした大枠で概念規定し、その第2段階とする画期が現われるのを「土師質土器様相」と表現すれば、ある程度、生産体制も時代性も

含みうることになろう。』^(註43)としている。土師質土器をロクロ土師器の第2段階とする考え方については、私も基本的には同意するところであるが、各地域の様相を概観する中で1983年のシンポジウム資料集と重複する点があるが私見を述べてみたい。

東北地方においては、古代末期の土器を特徴付けるものを「須恵系土器」と呼称している。この土器については、桑原滋郎によって「赤褐色を呈する素焼きの坏、皿などで、回転糸切りによってロクロから離され、坏・皿などは内外面ともに、再調整をまったく行なわないものである。器形としては、坏・皿のほか、台付皿などが多く、稀に三足をもつ皿、片口椀などがある。」と定義され、系譜的には、これらの土器群は「須恵器とはほとんど共伴せず内黒の土師器と共伴している事実」を掲げ、土師器とは異質なもので、「須恵器のうち、小型の器形のもの」が、還元炎焼成から酸化炎焼成に転化したもの^(註44)と考えられている。須恵系土器が使用された年代としては、岡田茂弘・桑原滋郎によって11世紀から12世紀末葉までとされているが、白鳥良一は多賀城跡でしばしば確認される灰白色火山灰との関連から、須恵系土器は10世紀前半には出現したと論じている^(註46)。中沢悟は、群馬県清里陣場遺跡出土土器の分析で、土師質土器の出現時期を、須恵器坏と古銭の共伴関係、新久窠跡出土のものとの類似点、浅間山噴出のB軽石層直下出土遺物等の検討から10世紀後半としている^(註47)。服部敬史は、「年代的な根拠は灰釉陶器に負うところが多いため、なお流動的である」としながらも、甲斐・信濃の状況も参考にしながら、依然として土師質土器の出現を11世紀代に考えている^(註48)。上総国においては、多賀城跡における須恵系土器の年代観を参考に、土師質土器の出現時期を10世紀第4四半期頃としている^(註49)。関東・東北地方においては多賀城跡を除いては、明確な年代的根拠は全くないのが現状と言えよう。他地域ではどうかというと、これも関東地方と大きな違いがないというのが実情であるが、ここでは2つの年代観を紹介してみたい。

吉岡康暢は、石川県東大寺領横江庄遺跡において、北陸南西部における奈良・平安時代の土器構成を詳細に分析され、3段階6期11小期（VI期以降についても若干検討している）に分類している^(註50)。この中で第IV期は、「須恵器の大幅な減産を背景に供繕形態の須恵器から黒色土師器・土師器への置換現象が、地域的不均等性を胎妊しつつかなり急速に進展した時期として要約することができる。」とし、「越中および越後では黒色土師器を補完する形で器種・器形を共有する底面に回転糸切り痕を残す粗製の土師器が量産され、埴主体の組成から皿が増加する時期と把握している。編年表を検討すると、IV期でも2小期から、粗製の土師器が出現しているようである。暦年代については、平城京の土器様式との関連から、IV₂期を9世紀後半から10世紀初頭頃としている。

松村一良は、筑後国府跡から出土した土器をAからP期まで16期17小期に分類している^(註51)。詳細な検討はなされていないが、編年表を検討するとG-1期に大きな変革期があるようであり、



第3図 筑後国府跡出土土器編年試案(松村・1983から抜粋)

東国における足高高台付坏様のものや、内面黒色処理された高台付坏も確認される。G-1期以降の様相を概観すると、足高高台付坏はI期になると見られなくなり、H期以降高台付碗、小皿が多くなる。黒色土器は、畿内における様相と連動するように、K期頃には姿を消している。各々の暦年代は、太宰府跡等との関連からG-1期-9世紀第3四半期、H期-10世紀初頭、I期-10世紀前半、K期-10世紀後半から11世紀初頭となっている。

ところで、前述のとおり多賀城跡における須恵系土器の出現は、10世紀前半頃と考えられているが、厳密に言えば明確な根拠があるわけではなく、白鳥の編年表によっても9世紀代まで遡る可能性が指摘されている。上総国においては、土師質土器の出現は10世紀第4四半期とされているが、あくまで多賀城跡との関連で想定されたものであり、独自に暦年代を決定した訳ではない。私は、市原市稻荷台遺跡出土の「貞観十七年」の紀年銘がある墨書土器皿と共伴する坏と同じものが土師質土器と共伴する事実について、簡単に混入として片付けてしまったことがあるが、^(註52)他地域の状況から判断して、混入ではなく、土師質土器の出現を「貞観十七年」近くに考えた方が妥当ではないかと現在は考えている。ただし、僅かにしか共伴しない事実を考えると、土師質土器の出現は、9世紀末葉から10世紀初頭頃に落ち着くのではないかと思われる。以上のような状況から律令的土器生産体制は、全国的にほぼ一律に9世紀第4四半期中にはほぼ終焉を迎えたと判断することができる。

9世紀末葉に須恵器生産体制は解体し大量生産を目的としたような粗製の坏・皿の出現や黒色土器の普遍化を基調としながら、足高高台付坏などを生み出しながら、律令的土器生産体制とは違った、現在の地域ブロック単位ぐらいの範囲で同一土器様相として把握できるような、土器構成の変革が進行したことは、何らかの歴史事象を反映したものであり、今後の大きな検討課題であろう。

最後に、「土師質土器」の名称について触れておこう。私は、ロクロ土師器の第二段階でも土師質土器でもよいと考えているが、土器生産体制上全国的規模で同じような変革が生じていることが明らかとなれば、土器様相としては中沢悟が提唱したように中世の土師質土器との共通性を見い出せるのであるから、「土師質土器」の名称がより適当なものであると考える。「漸移的に9世紀代の土器から変化して、明確な線が引けない」との意見もあるが、その点については、縄文土器と弥生土器、弥生土器と土師器の境界についても同様のことが言えるのであり理由とはならない。各時代の土器名は、歴史的事象等を考え併せて冠されているのであり、9世紀末葉から10世紀初頭に大きな社会状況の変化があり、それが土器様相に具現化されているならば、「土師器」と区別してもあながち不適當なことではないと考える。この点については、各地域の研究者が、徹底した議論をし尽くすべきであろう。

5. おわりに

以上、雑駁な記述に終始してしまったが、多少なりとも、次回のシンポジウムに参考になればと考えている。房総における奈良・平安時代土器研究は、現在大きな盛り上がりを見せている。現段階では、「編年作業」のみに終始しているといった批判もあるが、私も含めて、房総の土器研究者はそれのみを目的としているのではないのは当然であり、今後集落址の研究や当時の人間の動態を解明したいといった目標を持っている。しかし、その為には、遺跡・遺構のしっかりとした暦年代を決定する必要があり、指軸として「土器」が最も適切と考えるから、郡単位までも含めた土器様相の把握に努めているのである。私も、その一員として、さらに頑張っていきたいと考えている。

最後に、創立10周年を迎えた財団法人千葉県文化財センターの益々の発展を祈念するとともに、本稿を起草するに当たって、(勲)君津郡市文化財センター豊巻幸正氏、(勲)千葉県文化財センター笹生衛氏、久留米市教育委員会松村一良氏には多大な御教示を得たことに感謝の意を表したい。

註

- 註1 清藤一順他 1984.3 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』II 財団法人千葉県文化財センター
- 註2 佐久間豊 1982.3 「9世紀代須恵器研究の現状―千葉県」『関東地方における9世紀代の須恵器と瓦』49～55頁 立正大学文学部考古学研究室
- 註3 1983.10 『シンポジウム資料集 房総における奈良・平安時代の土器』 史館同人・市立市川考古博物館
- 註4 大川 清他 1976.3 『千葉縣市原市永田不入窯跡調査報告書』 千葉県教育委員会
山口直樹 1985.3 『千葉縣市原市永田、不入窯跡』 市原市教育委員会
- 註5 須田 勉 1977.3 「坊作遺跡の調査」 『上総国分寺台発掘調査概報』IV 上総国分寺台発掘調査団
- 註6 1984.12 「シンポジウム収録 房総における奈良・平安時代の土器」 『史館』第17号94～139頁 史館同人の104～105頁において論を展開している。
- 註7 佐久間豊 1983.10 「斜格子状暗文を有する土師器坏について」 『史館』第15号 92～119頁 史館同人
- 註8 服部敬史 1983.10 「奈良・平安時代の土器生産について」 『史館』第15号 140～156頁 史館同人
- 註9 山口辰一 1984.3 「武蔵国府関連遺跡における土器編年試論」 『武蔵国府関連遺跡調査報告』V 府中市埋蔵文化財調査報告第5集 100～160頁 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 註10 註5と同じ(107頁)
- 註11 註6と同じ
- 註12 福田健司 1978.12 「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」 『考古学雑誌』第64巻第3号 22～36頁 日本考古学会
- 註13 国平健三 1983.1 「相模地域」 『神奈川考古第14号 シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』15～26

頁

1983. 4 「シンポジウム収録 奈良・平安時代土器の諸問題」 『神奈川考古』第15号 67～119頁 神奈川考古同人会 を参考とした。
- 註14 高木博彦他 1978 「古瓦出土遺跡解説」 『企画展 房総の古瓦』22～30頁 千葉県立房総風土記の丘
大川 清 1963 「木更津市矢那瓦窯址」 『古代』49・50合併号
- 註15 1983年、千葉市土気地区遺跡調査会の御好意により遺物を実見させていただいた。それによれば、出土須恵器坏は市原市永田・不入窯址群出土須恵器坏に酷似したものと、ヘラ切りで箱状を呈するタイプの坏が共存していた。ただし、両者を併焼していたかどうかは不明であった。
- 註16 佐久間豊・井口崇 1984. 4 「千葉県市原市石川窯址における表面採集の須恵器」 『史館』第16号 25～35頁 史館同人
- 註17 土屋潤一郎 1983. 2 「八日市場市吉田所在の須恵器窯について」 『研究連絡誌』第3号 37～41頁 財団法人千葉県文化財センター
- 註18 倉田義広 1983. 3 「千葉市内の平安時代窯跡について一金親町・中原窯跡一」 『貝塚博物館紀要』第10号 1～20頁 千葉市加曾利貝塚博物館
- 註19 倉田義広 1983.10 「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」 『シンポジウム資料集 房総における奈良・平安時代の土器』 17～27頁 史館同人・市立市川考古博物館
- 註20 註8と同じ
- 註21 佐久間豊 1983. 4 「千葉県における奈良・平安時代の土器様相(1)」 『史館』第14号 86～101頁 史館同人
- 註22 1983. 4 「シンポジウム収録 奈良・平安時代の諸問題」 『神奈川考古』第15号 神奈川考古同人会 の98頁において論を展開している。
- 註23 後藤建一他 1982. 3 『静岡県湖西市宇津山城跡・東笠子遺跡群確認調査報告書』 静岡県湖西市教育委員会
大川清他 1975. 3 『静岡県湖西市 早稲川古窯跡』 湖西文化研究協議会
- 註24 註23と同じ
- 註25 根本康弘 1983. 3 「木葉下遺跡 I (窯跡)」 『常盤自動車道関係係埋蔵文化財発掘調査報告書』8 茨城県教育財団文化財調査報告第21集
- 註26 柳内寿彦他 1984. 3 「会津若松市大戸町 南原埋蔵文化財発掘調査概報」 福島県会津若松市教育委員会
- 註27 註23と同じ
その他、後藤建一氏の御教示による。
- 註28 服部敬史 1983. 1 「南武蔵の窯址」 『神奈川考古』第14号 シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題
一相模国と周辺地域の様相一 1～6頁 神奈川考古同人会
高橋一夫・宮 昌之 1983. 1 「北武蔵の窯址」 『同上』 7～14頁 神奈川考古同人会
- 註29 巽淳一郎 1983. 3 「古代窯業生産の展開—西日本を中心にして」 『文化財論叢』 659～685頁 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
- 註30 註8と同じ

房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題

- 註31 高橋信雄 1982. 2 「土器」 『岩手の土器—県内出土資料の集成—』 27～34頁 岩手県立博物館
- 註32 越川敏夫・長内美知枝 1983. 10 「下総東部における奈良・平安時代の土器編年試案」 『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』 50～70頁 史館同人・市立市川考古博物館
- 宮内勝巳 1983. 10 「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」 『同上』 33～49頁 同上
- 註33 註8と同じ
- 註34 豊巻幸正他 1983. 3 「永吉台遺跡(SG002)」 『年報』No.1 8～9頁 財団法人君津郡市文化財センター
- 註35 1984. 12 「シンポジウム収録 房総における奈良・平安時代の土器」 『史館』第17号 94～139頁 史館同人
- 註36 滝口 宏 1980. 3 『安房国分寺』 千葉県館山市教育委員会
- 註37 滝沢亮・長谷川厚 1983. 4 「ロクロ使用の酸化焰焼成の土器について」 『神奈川考古』第15号 45～65頁 神奈川考古同人会
- 註38 中沢 悟 1981. 3 「出土土器の分類と編年」 『清里・陣馬遺跡』 284～384頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註39 1986. 2 『神奈川考古第21号 シンポジウム古代末期～中世における在来系土器の諸問題』 神奈川考古同人会
- 註40 佐久間豊・豊巻幸正・笹生衛 1983. 10 「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」 『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』 1～16頁 史館同人・市立市川考古博物館
- 註41 註38と同じ
- 註42 註35の128～134頁で論を展開している。
- 註43 服部敬史 1986. 2 「関東甲信地域における古代末期の土器様相」 『神奈川考古第21号 シンポジウム古代末期～中世における在来系土器の諸問題』 1～9頁 神奈川考古同人会
- 註44 桑原滋郎 1976. 10 「須恵系土器について」 『東北考古学の諸問題』 441～469頁 東北考古学会
- 註45 岡田茂弘・桑原滋郎 1974. 3 「多賀城周辺における古代環形土器の変遷」 『研究紀要』I 65～92頁 宮城県多賀城跡調査研究所
- 註46 白鳥良一 1980. 3 「多賀城跡出土土器の変遷」 『研究紀要』VII 1～38頁 宮城県多賀城跡調査研究所
- 註47 註38と同じ
- 註48 註43と同じ
- 註49 註40と同じ
- 註50 吉岡康暢 1983. 3 「奈良・平安時代の土器編年」 『東大寺領横江庄遺跡』163～232頁 松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 註51 松村一良 1983. 7 「筑後国府の調査」 『古代文化』第35巻第7号 2～28頁 (勸古代学協会)
- 註52 佐久間豊 1983. 10 「旧上総国からみた下総各地の土器様相」 『シンポジウム資料集 房総における奈良・平安時代の土器』 79～81頁 史館同人・市立市川考古博物館
- (文化庁文化財保護部記念物課)